

『氷室』 2025年9月号
瓢鮎抄（二〇一）

秋めくや竹籠の柄の大振りに
迎香のつぼ押してをり秋未明
冠をただしてをさめ菊日和
前衣紋者後衣紋者爽やかに
四つに組む間もなく勝ちぬ草相撲
花崗岩露頭のもとの鳥兜
進化とは進歩にあらず女郎花
和紙貼つて佞武多の竜となりにつけり

ベンガルの人の群がる初紅葉
胃袋のかたちに似たる秋茄子
新涼の天ぷら蕎麦屋三代目
落鮎の九頭竜川を光らせて
秋暁や雲は激しく北西へ
野分雲速し信濃の国に入る
家苞は川中島の桃六個
塩尻駅四番線の葡萄棚
裏を見てまた表見る秋の滝
国東の巨大墓石や雁渡し

『氷室』 2025年8月号
瓢鮎抄（二〇〇）

梅雨明や上目遣ひの陶狸
宇治川の流れ激しく夏盛ん
月下美人咲き天頂の白鳥座
学問は勝負といはず青瓢
結論は秋へ持ちこし生ビール
止椀に土用蜆の味噌仕立
大歩危も小歩危も秋のけはいなり
石榴の実郷村断層左ずれ

伊吹山八合目より秋きざす
朝霧の沸き上がるなり古戦場
逆断層地形稔りの畦に沿ふ
扇状地の要に立ちて秋の川

吹き上ぐる段丘崖の吾亦紅
青北風や日本海より塩の道
役者絵は曾我十郎ぞ台風来
八月の成吉思汗の国に入る
張家口すぎて河北の秋の空
黄土層削り込んだる秋の水

『氷室』 2025年7月号
瓢鮎抄（一九九）

おがたまの花やバナナの香のしたり
卯の花や銘木店の植込みに
夏蔦のからむ赤坂見附跡
大蟻の難なく越ゆる礎石かな
この坂はどこまで登る若葉風
いつしかに定家葛の花の群
東京の街昼顔へ海の風
針桐の古株ねらふ梅雨茸

葉先より一滴の水梅雨晴間
雲ひとつ揺らして止まる水馬
夏空へ「ちきゅう」の櫓一段と
車窓よりかつての職場梅雨さなか
まきび公園入口近し芹の花
三日月堀の天守を乱す水澄
草鉄砲海に向ひて打ち放つ
ツバキ科ナツツバキ属なり沙羅の花
市松の模様めくなり麦刈られ
用ひとつ先送りして黒ビール

『氷室』 2025年6月号
瓢鮎抄（一九八）

一番茶刈りたる畑のうねりかな
朽ちかけし八ツ橋の釘風薫る
一日に散る花筒の野甘草
ふるさとの地形変はらず青時雨

すだ椎の花にぎはしく門の横
ざわざわと大吉山の椎の花
杜若三色そろへ光雲寺
麦秋や戦なくんば百五歳

老鶯を聴く天平の地の声と
老鶯をほめみてバスに遅れけり
白バイの畦道に入る青田かな
うたかたの紫香楽宮址いま青田
みな東向き絵筆持つ夏帽子
上流へ山科川の夏燕
鳥の羽一つぶら下げ蜘蛛の糸
無造作に手折りて間引く今年竹
古簾同士二階のなじみかな
三味線の音合はせらし夏暖簾

『氷室』 2025年5月号
瓢鮎抄（一九七）

春寒や案内のみぬ案内所
仕置場の柱の礎石春の菊
長八の鰻絵の竜や春の雷
くさぐさの根元に探す蝌蚪の国
荏原橋の下より花見舟のこゑ
この辺りかつて海岸菫草
残る鴨小鴨八百万愚節
特選に豪華賞品万愚節

電磁波の飛び交ふ宇宙万愚節
ゴジラ上陸地点なる岸松の芯
あべまきの雄花揺らすや初夏の風
「世界一たぶん」と竹の子の名札
桑の実の色さまざまや虫のため
吾の目線に泰山木の咲きくれし
季語になき花ぎやうさんに咲きて夏
巨大なる捕虫囊持つ鞆草
花石榴京に平安時代より
大口を開けて豹紋鞆草

『氷室』 2025年4月号
瓢鮎抄（一九六）

摩耶山を過ぐる夕日や山笑ふ
蜜蜂に声かけて菜の花畑
麦青む道は南北まつすぐに
蒲公英の角を右へと教へられ
富士全容霞の中よ富士見橋
住職の肩に載りたる仔猫かな
春風や直真陰流剣の先
春暁や座敷童子の夢に立つ

対岸は摩天楼なる桜かな
餓鬼道へ落ちざるやうに花の宴
この街を終の住処に花見酒
夜遊の街を貫き春の雷
一豊の天守閣なり花盛り
立ち寄れば桜蕊降る野点かな
つんつんと蕾つんつん躑躅かな
我が駅の新しくなり躑躅咲く
天気持ちさうとの知らせ春の旅
渡航許可主治医に受けて春の旅

『氷室』 2025年3月号
瓢鮎抄（一九五）

立春の門掃き朝をあたらしく
旧街道ななめに走る春の雪
春泥に足をとらるる鴉みて
クレーンの吊上げてをる春の雪
スコップを挿したるままに残り雪
朽ち果てし坑木に春の湿りあり
駆け足の地層巡りや春の湖
比良八講般若心経北へ向き

休日の町に春めく犬のこゑ

春一番並めて斜めに竹の幹
捻ぢれたる木に名のありて梅暦
ときどきの初音に猫の耳動き
山椒の芽まづしたためるお品書
落味噌や人それぞれの死生観
富士の日と新聞に知る二月かな
交換する土産の増ゆる旅や春
雪解水にじみ出てくる破碎帯
地震断層ここにあるはず春の雪

『氷室』 2025年2月号
瓢鮎抄（一九四）

雪だるまのごとき人来る雪の坂
味噌汁の鰯のうまさや北の国
豪雪や銀山の村五百年
生野路や銀山へ雪踏みしめて
白菜の一株残しある畑
放課後の子ども群がる雪の像
冬晴や貸切バスの受験生
旅にゐて一人夕餉の蜆汁

連山の影乱れざる冬の風
冬の水背負ふオモニの村に入る
ハラル山頂浮き出してをり雪のひだ
若き牡蠣付く熔岩の忘れ潮
馬の足の骨のスープと冬の島
鏡餅のごとくに雪を積みにけり
店員の機械語ばかり寒に入る
集合のただごとでなき寒鴉
故郷の新聞を読む寒日和
寒雷や一揆記せし砂岩の碑

『氷室』 2025年1月号
瓢鮎抄（一九三）

おさむおす祇園甲部は事始

衣食住足るも足らぬも冬支度
潮引けば海蝕台に海鼠壳
手袋に熔岩の崖よちのぼる
済州の海あらゆるものを寄鍋に
白菜のキムチ皿ごとつぎ足して
済州島の夜の静かなる聖樹かな
数へ日の出国手続き忙しく

鰯起し次の列車は二時間後
一呼吸おきてはずして暦果つ
掃納めあの日失せたる貝ボタン
鐘一つ打つたび雪のしづりけり
雲ひとつなき富士山の二日かな
初春や満月西に日は東
今は亡き写真家よりの初暦
初打の火の粉きらめく鍛冶場かな
雨の音ばかり聞こえる三日かな
通勤のラッシュ遅めの七日かな